

ラジオ番組における『聞き手』の立場

ディレクター 小 町 真 之
(『教育評価』担当)

放送大学のラジオ授業番組の聞き手の立場というものは、たいへん微妙で難しい——私はかねがねそう思っている。にもかかわらず、4年ぶりに『教育評価』を担当することになったとき、「今度は『聞き手』をつけよう」と思ったのは、その微妙で難しい立場をうまくこなしてくれる聞き手のあてがあったからである。そして、アワよくばその秘密を後で書いてもらおう、そう考えたのだった。だが『教育評価』の話に入るまえに、別のラジオ番組での聞き手のことを、まず書いておきたい。

1枚のメモ

数年前、『生涯教育論』というラジオ番組を担当したことがある。主任講師は、旧知の仲の大阪大学の麻生 誠教授で、彼の希望から『聞き手』をつけることになった。いろいろ探した挙句、フリーのアナウンサー・尾上明代さんをお願いしたが、そのとき、この番組でのアナウンサーの役割について、メモを書いて彼女に渡した。ここにその下書きがある。

○アナウンサーは聞き手(=学習者)の代表であると同時に、送り手の一員でもある。

- ・ストレート・トークの単調さに変化をつけること。
- ・講師のかたさをほぐし、和らげること。
- ・枠づけ——講師・ゲスト・テーマの紹介。
- ・きょうの『ねらい』を引き出す or 押さえること。
- ・きょうの『構成』を引き出す or 押さえること。
(話を構成する小テーマを話してもらう)
- ・話を聞くこと。
- ・分かりにくいところは聞き返すこと(分かったふりをしない)。
- ・話を展開させること(つぎの話題へ話を移す)。
- ・感想・意見・疑問を述べること。
- ・話のポイントを押さえること(自分なりにまとめ、確認する)。
- ・引用文を朗読すること。
- ・素材を収集し、提示すること(自分の経験を紹介する)。

*ゲストがいる場合

主たる質問役は講師。アナウンサーは控え目にし、質問のポイントを絞ること。

いま読み直してみて、われながら、ずいぶんたくさんの注文をつけたものだと思う。もう少し整理をすると、次の3点になる。

1. 講師（講義内容）と学習者とを媒介する役割

- ・その回の講師・ゲスト・テーマを紹介すること。
- ・その回のねらい・柱だてを引き出すこと。
- ・難しいところ・分からないところは聞き返すこと。

2. 番組に変化をつけ、単調さ・平板さを構造化・立体化する役割

- ・話のポイントを押さえること（自分なりにまとめ、確認する）。
- ・引用文を朗読すること。
- ・自分の経験を紹介すること。（これはテーマと学習者との関連を示すことでもある）。

3. 講師の話し相手（ないし聞き役）としての役割

- ・講師の話に反応することによって、講師の緊張を和らげること。

（マイクにたいして語りかけるのは、慣れないとなかなか難しい）。

この3点は、もちろん相互に絡み合っており、その境界はあいまいである。だが、このように注文が多いということ、これはそのまま、『聞き手』であるアナウンサーの立場の難しさを示している。

『聞き手』のスタンス

このときの『生涯教育論』は、講師がよく準備をしていたし、語り口が巧みなうえに、尾上さんの努力もあって、水準をこえる番組ができたと思う。だが、ディレクターとしては、課題がひとつ残った。それは、『聞き手は番組のテーマをどの程度知っているべきなのか』という課題である。『聞き手』は、テーマについてある程度知っていなければ、質問はできない。しかし、知りすぎていると、いい『聞き手』にはなれないことが多い。学習者を置き去りにしてしまうからである。問題の構造・関連は知っているが、細かい点は知らない、というのがいちばんいいのだが、そんな都合のいいように『聞き手』の知識をコントロールできるわけがない。知っていても知らないフリをする、という手もあるがどうしても不自然になってしまうだろう。——と、いうわけで『聞き手』の知的なスタンスをどうとるかが、このときの課題として残ったのである。急いで付け加えておくが、これはあくまでも放送大学の授業番組の場合である。ここでは講師が何を話すかについてのイメージを持っていて、事前の簡単な打ち合わせだけでは『聞き手』はそれを把握するのが困難なことが多い。『聞き手』が制作スタッフの一員として最終的に完成したときの番組のイメージを掴んでおり、その線にそって話を引き出す一般番組の場合とは、その点で大きく異なっている。

2つの『教育評価』

肥田野 直教授の『教育評価』を担当するのは、これで2回目である。前回昭和61年度は、先生が放送大学に着任された直後の初めての講義であり、今回は定年直前の、いわば最終講義ということになる。シリーズの構成は、今回の第14回に「生涯学習と評価」という、放送大学にふさわしいテーマが加わったくらいでそれほど大きな変更はない。

しかし演出形式の面では、2つのシリーズはかなり違う。おもな違いを表にして示してみよう。

| | 前回 | 今回 |
|-----|-----------------------------|--|
| | 講師のストレート・トーク 数回はゲストによる講義 | 『聞き手』との対談 全部主任講師が担当 |
| ゲスト | 専門の研究者 (スタジオでの講義) | なし |
| 素 材 | 引用文 (男女の俳優による朗読) | 実践者へのインタビュー (編集して対談中にインサート) 引用文 (聞き手／女優による朗読) |

この2つの違いが番組にどう表れているかは聞いていただければすぐ分かることだが、ディレクターとしては、講師の話に相手を説得しようという感情がこもってきたことが、一番大きな変化だと思っている。授業番組の場合、学問的な公正さ、中立性を意識するあまり、ともすると感情を抑えた話し方になりやすい。ストレート・トーク、つまりマイクにひとりで向かう場合に、とくにそうなりがちである。学問的な客観性は必要なことではあるが、講師の学問に対する情熱までも抑えてしまうことはない。今回は『聞き手』に人を得て、『教育評価』の重要性についての肥田野先生の『思い』を引き出した点が成功だったと考えている。

もうひとつ、前回ゲストとして登場して頂いたのは研究者であり、肥田野先生とはいわば同質だった。今回は、現場で評価の問題に取り組んでいる実践者や放送大学の卒業生にインタビューをして、それを対談のなかにインサートした。これは肥田野先生の発案だったが、人選が良かったこともあり、研究者と現場というコントラストもあって、効果的だった。ディレクターとしては、手間と時間がかかるが、かけただけのことはあったと思う。

『聞き手』への情報

『聞き手』が講師から話を引き出すためには、少なくともその回のねらいは何か、おもな柱は何かについて、あらかじめ知っている必要がある。今回は、前回の印刷教材があるため、ある程度はその見当がついた。しかし、番組のなかでそうした情報を得るような形をとるほうが自然だと考え、なるべく、〈番組の冒頭で今日のねらいとおもな項目について『聞き手』が質問し、講師に話してもらう〉という方法をとることにした。こうすれば、あとは『聞き手』が次の話題へと話を進めても不自然ではなくなる。学習心理学の教えるところによれば、学習者は学習のねらいや展開についてあらかじめ知っているほうが、より効果的に学習を進めることができるという。したがって、番組の最初にねらいやおもな項目について質問することは、学習心理学の知見にも適うことなのである。

今回『聞き手』をお願いした白鳥元雄氏は、大学での専攻が教育学であり、30年に及ぶNHKでのアナウンサー時代に教育問題を扱った番組を数多く手がけたこともあって、さまざまな問題をはらんでいる『教育評価』の『聞き手』としては、最適任だった。彼がどういう立場に立って、何を考えながら『聞き役』をつとめたかについては、次稿をお読みいただきたい。今後、『聞き手』の役割を考えるうえで、示唆する点が多いことと思う。